

ドイツ語の前置詞 **um** について

—「喪失」の意味における 用法の解釈を中心として—

山内 貞男

本来空間的に「あるものの周囲」を意味するドイツ語の前置詞 **um** には、「喪失・損失」の意味における派生的用法があり、この前置詞の様々な派生的用法のなかでも、独特な位置を占めている¹⁾。そしてこの用法は、前置詞 **um** の本来の意味における用法と他の派生的意味における用法に対して、一見全く異質的できえある。ところである前置詞に、その本来の意味における用法とそれからの派生的意味における用法とがある場合、本来の意味における用法からの様々な意味における用法の派生が、あるいは歴史的・社会的な、あるいは心理的または論理的な原因を持つにせよ、あるいはまたしかし今となっては殆ど確認し難いどのような原因を有するにせよ、本来の意味における用法と様々な派生的意味における用法との間、そしてまたこの様々な派生的意味における用法の間には、一般に一種有機的とも言える関連が認められるとすれば、それは前置詞 **um** の用法についても認められよう。すなわち、**um** に独特な「喪失・損失」の意味における派生的用法もその例外ではなく、**um** の本来の意味における用法および派生的意味における用法との有機的関連の中にあるものと考えられる。しかし、この用法について従来与えられている解釈には、その有機的関連性の点において欠ける処があるように思われる。そのため、**um** のこの用法の他の諸用法に対する外見的異質性がより一層目立つという結果になっているのではなかろうか。

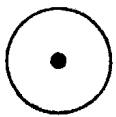
この小論は、前置詞 **um** のかような「喪失・損失」の意味における用法を全体的な有機的関連の中から解釈しようとするものであるが、この用法に

ついて与えられている諸家の解釈が、それぞれ決定的なものではなく、いわば推測であるのと同様、小論も異なった視点から可能な一つの解釈を示す試論であり、推測である。

前置詞 **um** は元来空間的に「あるものの周囲」を意味し、4格の補足語（名詞または代名詞）によって示される「あるもの」の「周囲」への、またはその「周囲」における運動あるいは静止状態を表わすが、この「あるもの」を点または任意の広がりとする、その「周囲」は、点として表わされる「あるもの」を中心点とする、または任意の広がりとして示される「あるもの」を内に包む円周である。前置詞 **um** の意味するところは、一般的に言って、この様に円で表わすことが出来る。空間的意味における他の用法と、他の時間的、方法的、因果・目的の意味における用法や意味上の主語を表わす用法等の派生的意味における用法も、すべて基本的に円で表わされ、様々の意味における用法に応じて円の全体または各部分が動的あるいは静的な姿で浮かび上がり、それぞれ際立った相を示す。この事を、今諸家の説明に従いあるいはそれを参考としながら、例を挙げて示せば次の通りとなる。

1. 空間的（運動および静止）

1) 周回運動と周囲

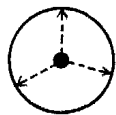


中心と円周

Die Erde läuft um die Sonne.

Es war ein Graben um die Stadt.

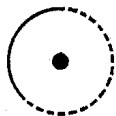
2) 放射的運動



中心から円周へ（遠心的）

Mit irren Augen blickte er um sich.

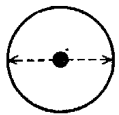
3) 部分的周回運動



中心と円弧

Er geht um die Ecke.

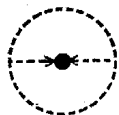
2. 時間的²⁾



1) 大体の時間

中心から円周へ→円周

um Mitternacht, um die Jahrhundertwende

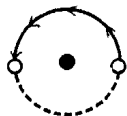


2) 精確な時刻

円周から中心へ→中心

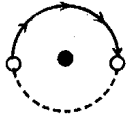
um acht Uhr, um halb neun

3. 方法的



1) 交換・代償

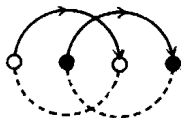
中心と円周上の一点 → 中心に対する、この一点の反対方向への移動



Er hatte seine letzte Kuh um 35 Rubel verkauft.

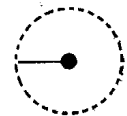
2) 交代

中心と円周上の一点……上述の交換・代償における「移動」の交互反復



Von Stufe zu Stufe ist er gestiegen, hat Prüfung um Prüfung bestanden.

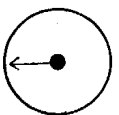
3) 程度(差異)



中心と円周上の一点→半径

Georg war um fünf Jahre älter als Hans.

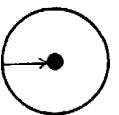
4. 因果・目的



1) 原因・動機・理由

中心から円周へ…原因から結果へ(遠心的)

Wie sie um dich besorgt ist! ; Warum ?



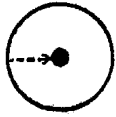
2) 目的(努力・獲得の対象)

円周から中心へ(求心的)

Wer sich um einen guten Stil bemüht, der wird drei

Vorteile erreichen.

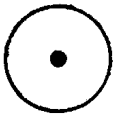
3) 関心の的・問題の中心



中心と円周→中心

Worum handelt es sich denn hier ?

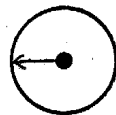
5. 意味上の主語



中心と円周…中心は主語的, 円周は述語的

Es ist eine schöne Sache um ein gutes Gedächtnis.

6. 喪失・損失



中心から円周へ (遠心的)

Er kommt um alles, was er hat.

Ägistos brachte Agamemnon ums Leben.

この最後の6. については, これが小論における問題の中心であるから, 次に具体的かつ詳細に考察の対象として取りあげよう。

前置詞 *um* が「喪失・損失」の意味において用いられるのは, 上例の如く自動詞 *kommen* または他動詞 *bringen* と共に熟語的に使われる場合である…… *um etwas kommen, jemanden um etwas bringen*. Grimm の *Deutsches Wörterbuch* によれば, *um et. kommen* は中高ドイツ語の時代から, そして *jn. um et. [殊に ums Leben] bringen* は Luther の時代から多くの用例が認められ, 特に前者は, 最初司法上の賠償・罰金について用いられていたが, 次第に一般化され様々の事柄に用いられるようになった。しかし前置詞 *um* が, 自動詞 *kommen* および他動詞 *bringen* と結合して, 「喪失・損失」の意味を表わすに至った経緯, 換言すれば, かような独特な用法成立の由来は明らかではない。またその解明も諸家によって試みられてはいるが, 未だ決定的なものは出ていないという状況にある。

ここでは Grimm の *Deutsches Wörterbuch* (以下 DWb. と略す),

Hermann Paul の Deutsches Wörterbuch (以下 Paul wb. と略す) および Götze-Mitzka の Trübners Deutsches Wörterbuch (以下 Trübner と略す) における所説を代表的なものとして取りあげ、検討を加え、それから私見を述べよう。

1. DWb.—Grimm の場合

Grimm は、前置詞 um の、自動詞 kommen と結び付いた「喪失・損失」の意味における用法の成立を、先ず「交換・代償」の意味における um の kommen との結合、次いで事物の主語の人の主語への転換(—Springen, Umprung 又は Umkehrung—)という、二段階より成る文法現象として把握しようとした。約言すれば、文法的な主語転換の原理からこれを解釈したのである。すなわち、一般に kaufen 等の動詞と共に用いられて、「交換・代償」を意味する前置詞 um が、kommen と結び付き、「代償」の意味において kosten と同様の働きをする (um~kommen=~kosten)。DWb. にはその例として次の文が挙げられている³⁾。

Kæm ein mâl umb ein phunt (Kostet ein schmaus ein pf.), ez dûchte iuch niht ze swære. …饗応が五ポンドかかっても、君達には荷が重すぎるとは思われまいだろう…

この文では事物の主語が現われているが、Grimm によれば、人間の肢体、道具、仕事、その他一般に事物に代わって手短に人間自身を主語として挙げる傾向があり、この事物の主語から人の主語への転換から、様々の不分明・不可解な比喩的用法が解明される⁴⁾として、einbüßen という意味での kommen um もこの観点から説明出来るであろうという推測が、次の文を例示して述べられている⁵⁾。

Ein vergehen kommt mir um 50 pfund. → Ich komme damit um 50 pfund.

これは要するに、事物の主語から人の主語への飛躍的な転換という文法現

象を原因として、um et. kommenの、et. kosten なる意味における用法からet. einbüßen なる意味における用法への転化、殊にその前置詞 um の、「代価」の意味における用法から「喪失・損失」の意味における用法への転化が生じたのであろうという推測的解釈である⁶⁾。ここにおいて、前置詞 um の「喪失・損失」の意味における用法の解釈は外的・形式的であり、従ってその用法の成立も、前置詞 um にとって多分に外因性のものとなる。

DWb. における所説には、この点に関する限り、前置詞 um の様々の意味における用法間に成り立つ有機的関連性を、従ってまたその有機的全体像を余り考慮していないという欠陥、別言すれば、前置詞 um に固有な、あるいはそれと有機的に関連する可能な機能を、前置詞 um の内側からも考察するという努力に欠ける点が認められるけれども、一般的に文法現象ないし言語現象は必ずしも論理的ではなく、内的必然的な原因によらずむしろ外的偶然的原因によって、外的、形式的に生起することも多いということを顧慮すれば、DWb. における所説は、推測として妥当なものであると思う。

DWb. の所説に対し、この所説自体には触れないで、その欠陥を克服するという努力から異説を立てているのが、Paul wb. であり、また Trübner である。

2. Paul wb. — Paul の場合

Paul は、問題の um et. kommen [および um et. bringen] を、対象となる事物の周囲における、人の周回運動→その事物への不到達=その事物の不獲得=その事物の喪失・損失なる心理的な類推の原理から解釈する。すなわち einbüßen, verlieren と意味を同じくする um et. kommen なる語法が成立した基礎には、恐らく人が事物の周囲を廻わり、従ってそれに達せず、それを得られず、すなわちそれを失うという見方があるのであろうと述べている⁷⁾。ここでは、「目的(獲得の対象)」の意味における前置詞 um の用法が強く意識され、更にその背景には「空間的(周回運動)」意味における

この前置詞本来の用法が認められる。この二つの用法は、勿論一つに重なっている。Grimm におけるとは全く対照的に、専ら前置詞 um の本来の「空間的（周回運動）」意味における用法・その比喩的な「目的（獲得の対象）」の意味における用法との関連において、内的かつ心理的に um et. kommen なる語法の解明を試み、それも「恐らく— wohl —」という表現を用いて断定を避け、推測という性格を与えている。しかし、問題となるのは不獲得＝喪失・損失なる類推である。そこに飛躍があるのではなからうか。獲得を意味する動詞は gewinnen (erlangen) であり、不獲得を意味する動詞は、nicht gewinnen (erlangen) として、gewinnen (erlangen) の反意語である verlieren に他ならない。しかるに um et. kommen は verlieren と同意語である。従って gewinnen (erlangen) の反意語はまた um et. kommen でもあるという推理が働いているとすれば、それは結論に関する限り正しくない。つまり不獲得＝喪失・損失なる類推は誤りとなる。verlieren なる動詞には、finden (発見) に対する遺失、haben および besitzen (所有) に対する喪失・損失、そして gewinnen (獲得) に対する逸失？を意味する三つの機能があるが⁸⁾、um et. kommen が該当するのは、三つのうち haben および besitzen (所用) に対する喪失・損失の意味における verlieren である。類推が言語現象において必ずしも論理的なものではなく、むしろ心理的であり、かつまた飛躍を許容するものであるという立場に立てば、不獲得＝喪失・損失なる類推も成立する。しかし、所有→喪失・損失なる状態の変化・推移が、前置詞 um の固有な機能と有機的に関連する可能な機能の考察から説明されるとするならば、その方がより自然ではなからうか。その意味において、Trübner における所説も Paul のそれと大同小異であると言えよう。

3. Trübner

前置詞 um の「喪失・損失」の意味における用法は、空間的な観念から、

umgehen が vermeiden として発達したのと類似の発達を辿ったものと考え得られるであろうと、やはりここにおいても推測という形で述べられている⁹⁾。これだけの短かな所説から、次のような、問題の用法成立ないし発達の経過を辿ることが出来るであろう。本来の「空間的(周回運動)」意味における用法→「空間的(部分的周回運動)」意味における用法＝比喩的な「迂回・回避」の意味における用法→「喪失・損失」の意味における用法。ここにもまた、「迂回・回避」から「喪失・損失」への転化において飛躍がある。類推の飛躍がある。Paul においても、また Trübner においてもその所説の基礎ないし出発点は、前置詞 um 本来の「空間的(周回運動)」意味における用法である。他に問題の um を解明し得る基礎ないし出発点が、前置詞 um のなかに見出だせないものであろうか。「交換」，「代償」，「代価」，そして「程度(差異)」までも意味するドイツ語の前置詞 um である。もっと直接的に、「喪失・損失」を意味する機能の可能性を um 自体のなかにも探れないものであろうか。

先に、Paul の所説も Trübner の所説もその基礎ないし出発点は、本来の「空間的(周回運動)」意味における用法であることを指摘したが、いずれの場合も問題の中心・関心の的となる事物(対象)の周辺にあって、一方ではこれを獲得しようと努め、他方ではこれを回避しようとする。人の主語の動きは、事物(対象)の周辺において、あるいは周辺から事物へ向ってなされる。ところで、この人の主語の動きを、問題の中心・関心の的である事物(所有しているもの)から離れて、その事物の周辺へ向うものとして、逆の方向に、いわば遠心的に把握すればどうであろう。

前置詞 um の、中心から円周へという遠心的機能は、その本来の「空間的」意味における放射的運動の用法においても、また比喩的な「因果・目的」意味における原因・動機・理由の用法においても、濃淡の差はあれ現われているが、ここ、すなわち「喪失・損失」の意味における用法においては、

それらとはまた違った意味において現われていると考えられる。前置詞 **um** の持つ、円周から中心へという求心的機能が強く顕在化するのには、比喩的な「因果・目的」意味における目的（努力・獲得の対象）を示す用法であるが、その反対方向の中心から円周へという遠心的機能が強く現われるのは、この目的（努力・獲得の対象）への求心的運動の原因・動機として、同じ「因果・目的」意味連関のなかにありながら、求心的機能と表裏一体を成す、原因・動機・理由を示す用法であることは勿論であるけれども、また別に、目的（努力・獲得の対象）への求心的運動の次の段階において、獲得・所有を媒介として、獲得物・所有物の喪失・損失を、人の主語（所有者）のそれからの離隔・分離という形で表わす、「喪失・損失」の意味における用法でもあろう。

この推測の基礎ないし出発点は、Paul および Trübner の場合とは全く視点を異にして、中心から円周への遠心的な離隔・分離という、前置詞 **um** に可能でまた妥当な機能がある〔と思われる〕ことである。この機能が顕在化するのには、それが自動詞 **kommen** および他動詞 **bringen** と結合し、「喪失・損失」の意味において用いられる場合であることは言うまでもない。従って、これらの動詞、殊に自動詞 **kommen** の意味内容を明確にしておく必要もあるが、先ずもう一度 **gewinnen・erlangen**（獲得）、**haben・besitzen**（所有）、および **verlieren・um et. kommen**（喪失）の関係を考察し、これを前置詞 **um** に内在的な求心的機能と遠心的機能との関連においてとらえよう。

この三つの系統の動詞の意味的関連については、**gewinnen・erlangen**（獲得）——**haben・besitzen**（所有）——**verlieren・um et. kommen**（喪失）なる図式が立てられる。上述の如く、**gewinnen・erlangen**（獲得）の反意語は、**nicht gewinnen・nicht erlangen**（不獲得）という意味での **verlieren**（逸失）であり、この図式における **verlieren・um et. kommen**（喪失）ではない。ここでは **haben・besitzen**（所有）と **verlieren・um et. kommen**（喪失）とが

反意語の関係になる¹⁰⁾。しかしこの図式のように、haben・besitzen (所有) を中心へ置くと、その左右両翼の gewinnen・erlangen (獲得) と verlieren・um et kommen (喪失) とは、haben・besitzen (所有) を介して、方向を逆にする反意語の関係に入る。gewinnen・erlangen (獲得) は、問題の中心・関心の的である意志や欲望の対象・目的へ向って、その周辺からこれを追求し、手に入れる求心的運動であり、haben・besitzen (所有) は、努力して獲得したもの——問題の中心・関心の的——を我がものとして持っている状態であり、そして verlieren・um et. kommen (喪失) は、問題の中心・関心の的である所有物から、何らかの原因により、その所有者が所有物の周辺へ隔たり離れあるいは隔たり離される遠心的運動であると言えよう。これを端的に表現すれば、gewinnen・erlangen (獲得) は円周から中心への運動、haben・besitzen (所有) は中心または中心における状態、そして verlieren・um et. kommen (喪失) は、gewinnen・erlangen (獲得) とは逆に、中心から円周への運動ということになる。ところで前置詞 um は、本来の空間的意味においてもまた派生的な比喩的意味においても、二つの事物を中心とその円周という関係において表現するものである。それ故、獲得 (円周から中心へ) ——所有 (中心) ——喪失 (中心から円周へ) なる図式において、前置詞 um の基本的機能に合致するのは、「獲得」と「喪失」であり、「所有」はそれから外れる。第一の「獲得」は、前置詞 um の一機能として、本来的な「空間的 (周回運動)」意味における用法を基盤とする、派生的・比喩的な「因果・目的」意味における目的 (努力・獲得の対象) を示す用法において、既に確固たる地位を築き上げ、公認されているけれども、第二の「喪失」は、前置詞 um の一機能として、「喪失・損失」の意味における用法に具体化されている〔と考えられる〕のであるが、その独特さ故にむしろわれわれを惑わせ、あるいは戸惑わせているのではなからうか。もしかような考察が正しいとすれば、ドイツ語の前置詞 um は、ものの周囲を意味する他国語の前置詞に比して、内包する可能性を最大限に発揮したと言えよう。

さて、第三の「所有」は、前述の通り円の中心に該当する故、前置詞 **um** の基本的機能に合致せず、従ってそれは如何なる意味の用法においてもほとんど具体化されないまま、中心の内奥に潜在している¹¹。唯「獲得」と「喪失」の二つの機能と目に見えない関係を保っているにすぎない。その意味において、前置詞 **um** の機能、従って用法に関する限り、上述の獲得—所有—喪失なる図式は、獲得—(所有)—喪失と改めなければならない。しかし、これを単に獲得—喪失なる図式に変えることは許されない。あくまでも、顕在化・具体化されなくとも、中心の媒介項たる「所有」を無視し、省略することは認められないし、また他の如何なるものによっても置き換えることは出来ない。Paul の所説に認められる飛躍、従って誤りは、上の図式の媒介項に「不獲得」を置き、獲得—不獲得—喪失となしたことにある。そしてそれは逆れば、前置詞 **um** に独特な一機能「喪失」を、「獲得」および「所有」との関連において、中心から円周への遠心的方向における運動として把握しなかったことに依る。ところで、Paul において成立する獲得—不獲得—喪失なる図式は、Paul の所説に忠実に改めれば、獲得〔の努力〕—不獲得—喪失となる。「不獲得」は媒介項に似て、実は媒介項ではなく、従って「獲得」と「(不獲得=)喪失」とが無媒介に関係づけられている為、そこに無理が生じ、牽強附会の感を免れないのではなかろうか。

次に、先にも少し触れた如く、前置詞 **um** の「喪失」という中心から円周への遠心的機能を顕在化させる上に大きな役割を果たす動詞の検討に移ろう。**bringen** は自動詞 **kommen** に対する他動詞の機能を有するから、ここでは自動詞 **kommen** を取り上げることにする。Paul に従えば¹²、一般的に **gehen** が主体的・意図的運動の経過を意味するに対し、**kommen** は主体の、状況に制約された、あるいは客体の意志に制約された運動の結果を意味する。前置詞 **um** と結びついて「喪失」を意味する場合、殊に **kommen** のこの本質的な意味が強く現われているように思われる。「喪失」に関する限り、

それは、たとえ当事者の不注意等の主体的条件はあるにしても、状況とか客体の意志に制約されて、換言すればそれらを原因として生じるものであって、普通決して主体的、意図的なものではない。um et. kommen が最初には唯法律上の賠償とか罰金についてのみ用いられたというのも、十分に首肯し得る。他動詞 bringen の場合、ここで言う客体が主語となる故、その目的・対象となる主体(人)が客体の意志の制約を受けることは一層明白である¹³⁾。

かような性格の um et. kommen である故、主語となる所有者が主体的・意図的にその所有物から離れるということではなく、所有者が、客体の意志によりあるいは状況によって、無理やりにその所有物から離れるようにさせられるのである。しかも、人がその所有する物、置かれている地位、境遇等から離れ、あるいは離されるという表現により、人がその所有する物、置かれている地位、境遇等を失い、あるいは奪われることを意味するのが、ヨーロッパの印欧語族に属する諸言語に古くから共通する特色であれば¹⁴⁾、um et. kommen (および jn. um et. bringen) なる語法に、問題の中心・関心の的である所有物からその周辺へ所有者が離隔し、これを喪失するという意味を持たせるのも、決して奇異ではないであろう¹⁵⁾。

ドイツ語の前置詞 um に独特な「喪失・損失」の意味における用法〔の成立〕を、Grimm, Paul および Trübner における解釈を検討しながら、前置詞 um の内側—中心から円周への遠心的機能と獲得—(所有)—喪失なる図式—と、その外側—kommen の本質的意味と所有者の所有物からの離隔なる語法による喪失の意味の表現—とから考察して来た¹⁶⁾。現代の文法学ないし言語学の大勢に逆行するほど思弁的な推論ではあるが、それでも何らかの意義があれば幸いである。

(注)

- 1) ドイツ語の前置詞 um にある「喪失・損失」の意味における用法と同じ用法が、北ゲルマン語系のデンマーク語の前置詞 om にも、また同じ西ゲルマン語系のオランダ語の前置詞 om にもある。デンマーク語 : komme om livet (=ums Leben kommen) ; オランダ語 : om het leven komen (=het leven verliezen) 。しかもこの「喪失・損失」の意味における前置詞 um に関係があると思われる動詞 umkommen, umbringen と全く同意の動詞がデンマーク語において omkomme, ombringe, オランダ語において omkomen, ombrengen という形で在る。デンマーク語の辞典 Ordbog over det Danske Sprog 第15巻の omkomme の項によると、「ドイツ語の umkommen に倣って」—efter ty. umkommen—と記され、意味も同じである旨明記されている。なお Grimm もその DWb. V, kommen (I, 35), g), β) の最後に、オランダ語においてもドイツ語におけると同様の語法があることを指摘している : ebenso nl. om het leven komen u. a. これもやはり当然ドイツ語の語法に従ったものであろう。
- 2) 派生的意味における用法の素地には、常に本来的意味における用法があり、また派生的意味における用法間にも緊密な有機的関連がある。
- 3) DWb. V, kommen (I, 36), a), a) : „der preis wird mit um bezeichnet, wie bei kaufen u. a. : …以下本文に引用せる例文…Haupt 2, 79“
- 4) DWb. V, kommen (I, 10) : „Bemerkenswert ist die neigung, statt gliedes, werkzeuges, einer arbeit u. dgl. kurzweg den menschen selbst zu nennen. aus dieser manchmal wunderbar kühnen kürzweg der fassung erklären sich mancherlei sonst dunkle bildliche verwendungen, nicht bloß hier.“
- 5) DWb. V, kommen (I, 36), a), δ) : „man könnte daraus das kommen um einbüßen 35, g erklären durch das unter 10 besprochne springen des subjects, ein vergehen kommt mir um 50 pfund umgesprungen in ich komme damit um 50 pfund.“ なお下線は筆者による。以下同様。
- 6) 因みに DWb. から次の二箇所を引用しておく。V, kommen (I, 35) : „Noch sind verwendungen mit präpositionen übrig, deren sinnlicher ursprung jetzt verdunkelt ist, darunter solche die jetzt vergessen sind. g) mit um, verlieren, einbüßen, zu erklären weisz ich nicht (eine vermutung s. 36, a, δ), …“ XI, Um M. : „ungeklärt bleibt die entstehung des gebrauches von um zur bezeichnung einer einbusze, eines verlustes, vornehmlich in den parallelen fügungen bringen um-kommen um.“ 以下 5) に引用した eine

vermutung の指示があり、次いで Paul wb. の見解が引用されている。Paul の見解に関しては引用の冒頭に „anders“ —Grimm [の推測的解釈] とは異なっただけである。

- 7) Paul wb. (7. Aufl., VEB MAX NIEMEYER VERLAG, 1960) 650~1頁 um 1, e) : „Eigentümlich sind um etwas kommen, bringen ; es liegt wohl die Anschauung zugrunde, daß man um etwas herumkommt und es deshalb nicht erlangt oder es verliert. Man sagt auch um etwas sein, vgl. ich bin um meinen Schlummer Schi.“
- 8) Paul wb. „verlieren“ および Trübner 7.Bd. „verlieren“ の項参照。
- 9) Trübner 7. Bd. um (226頁) : „Der Gebrauch zur Angabe eines Verlustes, vor allem in den Verbindungen um etwas kommen und jemanden um etwas bringen ist ebenso wenig sicher erklärt wie die Verben umbringen und umkommen. Denkbar wäre es, daß er sich aus räumlicher Vorstellung ähnlich entwickelt hat wie umgehen als ‘vermeiden’.“
- 10) Sanders Wb. d. Deut. Spr., um: „n) um ein Gut, das man besitzt, kommen, es einbüßen, verlieren, z. B. ums Leben, um sein Geld, um seine Stelle kommen (wobei das subj. immer einigermaßen persönlich. ist oder gedacht wird), versch. : um Etwas kommen, das man holen, in dessen Besitz man erst gelangen will.“
 ここでは um et. kommen の besitzen との反意語関係が明確に現われている。またあるものを獲得せんとする意味における um et. kommen の用法が廃れたとの記述は、獲得—(所有)—喪失なる図式により「喪失」の意味における um の、従ってまた um et. kommen の成立を探ろうとする時、重大な意味を持つ。um et. kommen の機能が「所有」を軸として「獲得」から「喪失」の方へ移ってしまった、遠心的方向における側面のみで整理されたとも言えるであろう。
- 11) um の様々の意味における用法中、中心のみを表わすのは、派生的・比喩的な時間的意味における用法のうち「精確な時刻」を示す用法である。これは、数詞によって示される一定の精確な時刻以前の時間がそこへ流れ込み、それ以後の時間がそこから流れ出る、時間の凝集点を示すと考えられる。その意味において、この瞬間的な一時点は時間のすべてを「所有」すると言えよう。因みに、ここ(本論)で意味されている「所有」とは所有者と所有物とが所有・被所有の関係において、分離・隔離されることなく一つである状態のことである。
- 12) Paul wb. kommen の項参照。
- 13) jn. um et. bringen は、人をその所有物との所有・被所有という一体化的関係

から引き離して、そのものの周辺へ移し、かくして人にそのものを失わせるということの意味する。なお Johann Hitzler betrog den Super-Betrüger um 13 000 Mark. なる文中の定動詞 betrog にはこの場合また brachte とも言える機能がある。durch Betrügen brachte の意味を持つ。Paul はその Wb. um の項 1,f) (651頁)において、„Äußer-lich ähnlich, ihrem Ursprung nach aber wohl doch davon verschieden sind einen um 10 Mark strafen (in der älteren Sprache büßen), betrügen u. dgl.“ と述べているが、かような語法は、関口存男氏のいわゆる搬動語法の考えによって始めて理解が可能となる。基本はやはり jn. um et. bringen である。

- 14) これは人の対格ないし人の主格と事物の属格(奪格的)ないし分離を意味する前置詞と事物の目的とで表現される。因みに Lexers Mhd. Hwb. の umkommen の項には „mit gen. um etw. kommen Myst. 2. 160. 3“ と記してあり、umkommen なる「終る、死ぬ」を意味する自動詞が属格(2格)の補足語をとって丁度 um et. kommen と同様の「失う」を意味し、その用例として F. Pfeiffer 編 Deutsche Mystiker des vierzehnten Jahrhunderts の第2巻 Meister Eckhart の説教 XLV III. 160頁3行~4行を示している。„Wer der sele umbekême und engelustete si sîn niht, gotes lieht enwêre dâ inne bewunden.“ …魂を失い、魂たることを求めない者の内には、神の光は見出されないであろう。…
- 15) DWb. kommen (II.35), g), γ): „dann auch unsinnlich: üm sein recht kommen. Stieler 1006 ; …… ; um den verstand kommen. früher auch um sich, wie auszer sich, von sich (30) :
- sollt ihr mir sein genommen,
so bin ich ümm mich kommen.
bin ich von euch verlassen,
so musz ich mich selbst hassen.
- Fleming 449 (376 Lapp.)“

これによれば außer sich kommen ないし von sich kommen と同様の意味において um sich kommen が用いられたということである。verlieren という意味の定型的表現として固まった um et. kommen の et. なる4格補足語の位置へ再帰代名詞の4格を代入したままのこととも考えられるが、やはり um の中心から円周へという、「喪失」を意味する遠心的機能がこの点において von や außer なる前置詞の機能とほぼ合致したものととれよう。

なお Der Große Duden Band 2, Stilwb. の kommen の項 (322頁~323頁) においては 1) aus etwas heraus kommen, von etwas weg kommen, etwas

verlieren : として, 他の「中から出る, 離れる」という意味系統の動詞の様々な用例と共に, まとめて um et. kommen の用例が挙げられている。

なおまた注 7) に引用した Paul wb. um l, e), および Grimm の Deutsche Grammatik IV. Bd. [798] 961頁 には um et. sein の用例が挙げられている。Grimm の Deutsche Grammatik における文例 : ich bin darum (habe es verloren), ich bin um das Geld. これは勿論 um et. kommen ないしは jn. um et. bringen なる状態の変化ないしは動作の完了の結果としての状態を示すものである。

- 16) この小論において考察の対象とはならなかった合成動詞 umbringen および umkommen は, 簡単に言えば jn. ums Leben bringen および ums Leben kommen の簡略化された形で, töten および sterben を意味する。しかしこのように簡略化と考えられるか否か。両者の関係については, Grimm の DWb. においてもまた Trübner においても明確な説明はなされていない。

参考のため Trübner の umbringen の項 (228頁) における説明を挙げておく。

„Die Erklärung ist bisher ebensowenig geglückt wie bei dem in diesem Sinn mhd. überhaupt nicht bezeugten umkommen. Um das Leben bringen erscheint selbst erst im 16. Jh., aber da schon häufig, auch ähnliche Wendungen wie 1511 : „Ain kirchen untrülich umb das ir zu bringen, ist vergewaltigung geweichter güter.“ Voraus geht als einziger mhd. Beleg : Swer mich bringet um die gāb, dāvon ich itewiz (Tadel, Vorwurf) gewinne. Vermutlich ist die Grundbedeutung doch die, daß man um etwas herumgebracht wird und es so nicht erlangt. Beleg ist die Bedeutung töten zuerst bei Meister Eckhart (um 1260—1327) : Nu spricht die geschrift von diesem marterēren, daz sie umbe Kristi namen den tot gelitten haben und durch daz swert umbbräht sīn.“